

## Special Essay

### 一外科医として思うこと

形成外科・顎顔面外科学講座

清川 兼輔

昨今一外科医として思うことは、外科系医師の将来である。一言で言うと、「現状のままでは手術を中心とした外科系医師の医療レベルは間違いなく低下する」ということである。その主たる要因として、若い世代の考え方や生き方 社会的状況の2つがある。そしてそれら両者が相加相乗的にそのレベルの低下に拍車をかけている。

の若い世代の考え方や生き方は、どの業界でもほぼ同じで、楽をしてお金が稼げること、自分の自由な時間があることである。これは、医療業界においても例外ではない。従って、人の体にメスを入れる技術屋として厳しい訓練と徒弟制度を必要とし、かつ自由な時間が非常に少ない外科医の仕事に馴染む術もない。確かにそれらを耐え抜き高い技術を修得したあかつきには、大きな収入が得られるという保証があれば別だが、それも望めないのが現状である。例えば、私は形成外科医であるが、近年若い形成外科医が少なからずトレーニング半ばにして美容外科に流れている。

の社会的状況については、訴訟問題である。特に高い技術レベルを必要とする難しい手術は、つらい修業を伴う上に当然リスクも伴う。何かあれば、家族に疑いの目で見られマスコミにはたたかれる。そんな責任やリスクは負いたくないし負うだけ馬鹿らしいというのは、今の若い世代の誰しもが思うことであろう。

実際に外科系の科を選択する医師が激減している。将来一番困るのは、患者さん自身なのである。この問題の解決策は、医療業界の中だけで考えても決してその答えは出ない。赤ひげ外科医の誕生など望めない今、その解決策を社会全体で考える必要性を痛感している。

